

# 肺がん患者リハビリ 施設間連携

## 東広島医療センターでの手術前後 近隣病院で受け入れ

肺がんの手術前後に、複数の医療機関が連携してリハビリを提供する取り組みが、東広島市、竹原市、大崎上島町でつくる広島中央2次保健医療圏で始まっている。患者は、東広島医療センター（東広島市）での入院・手術の前後に、身近な医療機関に通院してリハビリをする。術後の呼吸機能の低下を抑え、肺炎などの合併症を防いで早期回復につなげる。（鈴木大介）

東広島市の木阪病院のリハビリ室。10月下旬の肺がん手術を控え、同市の造園業の男性（65）が深呼吸をしていた。呼吸に必要な肺周辺の筋肉を鍛える動きだそう。「しっかりと吸い込んでから息をはきましよう。背筋を伸ばした方が呼吸しやすくなりますよ」と、リハビリテーション科の作業療法士中平啓太さん（41）に励まされ、約1時間取り組んだ。男性は9月下旬から週2回リハビリに通い、自転車型の

「手術をがん治療としてだけでなく、健康な体を取り戻す機会ととらえてほしい」と話す原田部長



マシンや早足歩行などで基礎体力を高めてきた。東広島医療センターで手術し、退院後に再び木阪病院で約2カ月リハビリを続ける予定だ。男性は「早く仕事に復帰できるように体力を維持したい」と話す。

### 「医療資源少ない地方で有効」

連携リハの対象は手術が必要な肺がん患者で、慢性閉塞性肺疾患（COPD）を併発している人。肺機能が弱った患者は、手術でさらに呼吸がしんどくなり、活動量が落ちる。動かないと筋力の低下や食事量の減少につながり、悪循環に陥る。

施設間の連携は、そんな悪循環を食い止めようと、同セ

ンター呼吸器外科の原田洋明診療部長（54）が呼びかけた。同センターは入院中の患者の対応で手いっぱい、外来のリハビリ受け入れは難しい状況だった。原田部長は「入院中のリハビリだけでは呼吸や体の回復が不十分。少しでも状態を良くして手術に臨み、日常生活に早く復帰してもらいたい」と話す。

近隣の木阪病院に協力を打診し、2023年4月に開始。今年4月からは竹原市の安田病院も加わっている。同病院は「竹原市内の患者も退院後に東広島まで通う必要がなく、自宅近くの病院でリハビリができる」と強調する。

同センターと木阪病院、安田病院は、歩行距離や体のバランス、握力など共通の評価項目を決め、リハビリの初回や手術前後など定期的に測定して変化を確認。3施設の医師や作業療法士たちがウェブ会議で患者の状況を共有している。

これまでに患者35人が連携



中平さん④の指導を受けて手術前のリハビリをする男性患者（木阪病院）



定期的に関くウェブ会議で患者の状態を共有する医師やリハビリスタッフたち（東広島医療センター）

リハに参加。7月下旬に手術を終えた東広島市の会社員男性（67）は手術前後で計約3カ月間、木阪病院でリハビリを続けた。「手術後は体力が落ちて息切れしていたが、退院後も関わってもらい安心感があつた」と振り返る。

手術前後のリハビリで多施設が連携する試みは珍しいという。原田部長は「医療資源に限られる地方では、複数の施設による連携は欠かせない。肺がんでだけでなく、他の臓器にも広がっていれば多くの患者にとってメリットになる」と話す。